胃がんについて

内科医長
仲谷（なかや）　朋久（ともひさ）

みなさん、こんにちは。内科医長の仲谷です。

胃がんは高齢者人口の増加にともない、現在日本において最も患者数の多いがんです。

男性では約9人に1人が、女性では18人に1人が胃がんになるといわれています。

胃がんの原因としては食塩の過剰摂取、ピロリ菌の感染、遺伝的要因、喫煙、アルコールの大量摂取、ストレスなどが挙げられます。ピロリ菌は50歳以上の約80％の人が感染しているといわれており、感染すると慢性胃炎を引き起こします。これまで検診や内視鏡検査で慢性胃炎があるといわれた方は注意が必要です。

最初に胃がんの患者数が多いと書きましたが、胃がんの死亡率は年々減少しています。その理由として胃がんの早期発見、早期治療の進歩が挙げられます。

近年内視鏡検査（胃カメラ）の普及や、内視鏡装置の進歩もあり早期に発見される胃がんが増えています。早期胃がんは自覚症状に乏しく、大半は無症状のまま検診などで偶然発見されます。また内視鏡装置も日々進化しており、現在ひとくくりに「胃カメラ」といっても外径約5ミリメートルの非常に細くて、苦痛の少ない経鼻用内視鏡や、数ミリの小さな癌も発見できる拡大内視鏡、画像強調観察があります。

早期胃がんの治療もここ数年で著しく進歩しており、早期胃がんの中で、がんが粘膜内にとどまりリンパ節転移がないものに関してはESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）という胃カメラで行う治療が一般的になってきています。

この治療の特徴は胃カメラで治療を行うため胃カメラができる人であれば高齢者でも可能ですし、胃を温存することができるため、治療後の痛みも軽く、入院期間も短くなります。

よく病院を受診される人で「検査をして癌が発見されるのがこわいので検査をしたくない」といわれる人がいますが、無症状の胃癌の大半は根治可能ですし、内視鏡治療ができない場合でも外科的治療を含め治療は進歩しています。

また「日ごろ血液検査をしているので胃カメラはしたくない」といわれる人もいますが、血液検査でわかる胃がんは進行していることが多いのでぜひ定期的に内視鏡検診を受けましょう。

-広報きつき　平成23年 8月号掲載-